

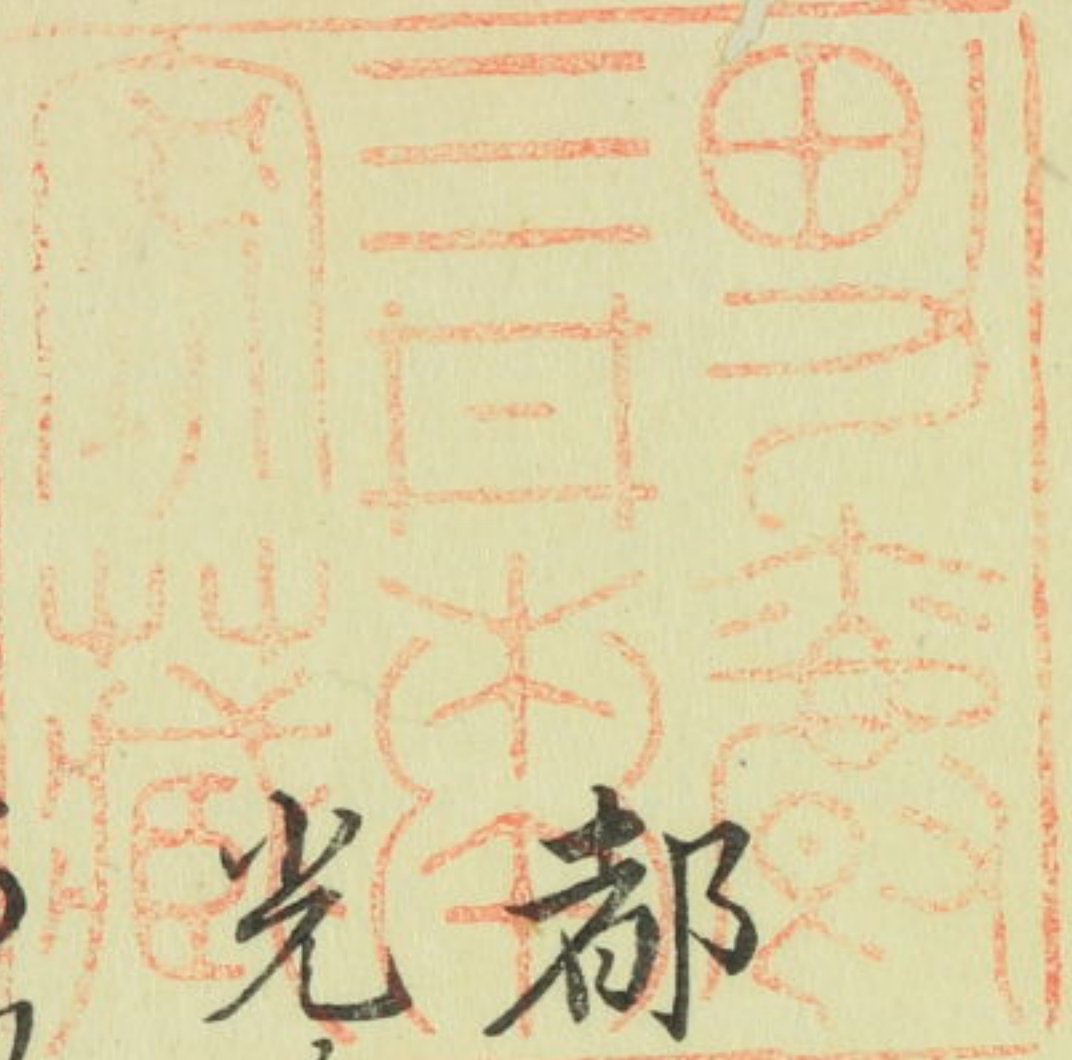


手折菜  
花



鳥

鳥



都の春を過るし睦月れ末は  
 光陰を徒然に身は  
 の海りも指を打くかそよみ  
 實も如雲水乃客となり初  
 以未三斗之也を其事秋を風  
 の岐小たぐらひ初之越奥羽の

國々鳥の如く音妻の世に

古の音もさうさうもさうもさうもさうも

江戸のふらふら杖をさすめ

滑稽俳諧乃道哉能楽心

由哉得侍り哉後まゝ其意を

もたぬ風文たのしみあゝ礼

西乃海面は海くこ不知火乃

筑紫の文字のむかひたる人

河のゆきむ通郷て師友の

まらむるい事しつゝ又文宗

詩袖名親子む月を山瓊文

影うゝとれ旅寓に諸越又

のちこころをさへしむるに  
及ぶに跡館ふし録り何事  
故郷も府子しあはれ侍  
兵に備はるるにぬれどか  
海客のしむるにまはるる  
うら若きと云ふ舊址故蹟乃

昔よも〜人か年ふ満ぬ  
粟はらと云ふも〜  
と云ふのかより筆は向か  
梓堂海〜る以本は〜に  
ちりりもあすやと獨〜  
字の他も〜勢時の文化九

主申好等一石早萌  
 以部名久那案長門  
 一字養業舍尼自叙



手抄業一

余みかゝる夫はほれ家の緒ほく子  
 其れはゆり者人の子を養子と家計  
 此事を内を譲りし今浮世暇はく身之  
 成ぬ事は天を託る各子ありと云く  
 神社佛閣をお訪りて其の由の三日を  
 候よみおとりの旅路におしむらぬ  
 月を以て年一着く候もや旅乃共ら

大津乃人丸明神

吾はまふし満と云めや蟬と云ふ

深く引む筆柿の美ふし成り時

静浦を過く海心こころふらふ船

乗り恙なく秋城ふらぬ爰に清光寺

門心院老師を括くまわり津弟子とあり

後世の事たゞいこゆんこゝろよ教を受け後

剃髪とるる心

秋風より浮世乃を身を拂らり

客不行真令其音きこふるこゝろ通家の

人む素とるる俗語を好ま道予くこゝろ道小志

吾を案し朝暮園傘担とくは美濃乃

宗道の許く添書を徳免玉のぬ

宮市で満字して

深る秋も二葉乃末り梅紅葉

あふらん沖はあつ後忠池のあ

神無月中此之田尻とるる船ふ系難波はくや

漕出を須磨の沖より

船路新ハ浪應テ流路不子多ク

雲月の初難波津へつきぬけ地乃名不尋年

ともと思へとも 祖師聖人の報恩講小

おろきやきんと急テ京都了よりぬ

本願寺小詣く七昼夜の浄讀経不違時

報恩をおのへいころし一室乃並

今冬々々々系係をより報恩講

浄讀経おろして程あり難波津へてゆり年を

越る日高津の社をおく

高き屋をまのりおこりる初日歌

雲了谷清多流とく人をおくくやさく

予々雲水の身あふを懐く最初難波津

つぎしそいとま深くいふり長く留まぬ

やろく又松路へおもむくとき

つゆも惜し梅乃難波の松衣

再ハ京都へ入り倭泉とく佛尼を執り

ある日依え乃梅溪ふ玉り花をみる時り

吹方ハ昔のまおしおぬお梅うか

昔も昔のよきとくを梅乃也

尼 倭泉

京都を去る様終へ競くるをうす都のよき

錦ある比多しを誨め志賀の山越近の路不

かすも湖水のまを服了り今く魚のふく

湖了果あふんえりも花雪竹

二月の末つうく美波園ふる朝暮園宗

通を初く初一時

咲あふり今更く手れきと嬉し

志あふもこのの海りらう

傘狂

宗匠のも業不報日淨るあゆ附合出る

○長府小奇良の風尼妙意雅名ハ菊車ととも  
去年の秋をうむ目乃位を記す意を  
杖を突つてしつゝ後知の程より思ひまゝに  
謂や祖師の舊路凡サ四輩を説くめをり  
正風の俗強りて予うあつてをも中より年比の空  
を遊んとあつて去うて秋より竹葉空を流るを  
とくはくやうく事あり即ち宗祖他力乃悲死  
みハ俗強りて遺化よまの路よの道刻五物  
何れも初より一意懸あれハ彼 聖人乃雨後の  
月乃孤雲ふきくき 修り地了り二  
あつてを  
こゝに

和らうりてくくくあ終月

朝暮園

あつてのまを記すふく

菊車



お訓深乃義理より一季を世にそ 文水

意より何事けなく何事也 大悟

お世より影を移さみきしし 万裏

ふやてふくと念珠利もむ 虫徒

白粥の馳走も雪乃朝あきハ 曾葉

窓より身此 飛く 山茶花 杜静

右表八句

此比古々々里父の文事よりかむふ

卯年ハ余の齡耳鳴り及ひぬきと早くも

巡りまゝゆるゆしゆぬ程ハ年加るをも

とやういと意おもひの言葉 猶ふせむるをせむる

賀章ありと集めんとおのひ急きつ小冊を

初もしそ歌を父の春に記して

世乃花をあつた脱しむハ能事也

○長き前

又を累ス

松も杖も目出さ度きより十かゆん 朝暮雲

松の佳節より逢ぬきハ

爰より道乃津より初や露のりふ

松吟やまもくも目ふかかれも

朝暮箋

美江寺正田は阜長良洞の里大垣邊

懸くく時友の贈茶附合致せり

○菊車凡凡不<sub>レ</sub>信乃一字を興<sub>レ</sub>言行不<sub>レ</sub>兩<sub>レ</sub>失<sub>レ</sub>ハ  
為<sub>レ</sub>信卜の意をとりて「やま」<sub>二</sub>と号<sub>レ</sub>けたり且<sub>レ</sub>ッ  
越<sub>レ</sub>行乃そ途を<sub>レ</sub>送<sub>レ</sub>り  
別<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>とて

一教も耳不<sub>レ</sub>知くハあ<sub>レ</sub>く三<sub>レ</sub>次

朝暮箋

又徳のお山もま<sub>レ</sub>とふれ<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>稿

寂寞無聊の限あ<sub>レ</sub>し

かんあ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>字<sub>レ</sub>ぬ<sub>レ</sub>月<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>あり<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>核

卯花乃雪や伊吹の山むら<sub>レ</sub>し

江州柳ヶ渚乃岸不<sub>レ</sub>玉<sub>レ</sub>り道通<sub>レ</sub>てぬ<sub>レ</sub>云

を<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>く

通<sub>レ</sub>さぬ<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>史<sub>レ</sub>郭<sub>レ</sub>公

越前吉崎の清寺不<sub>レ</sub>請<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>山<sub>レ</sub>よ<sub>レ</sub>字<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>

蓮如上人乃故<sub>レ</sub>流<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>史<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>ハ

穴<sub>レ</sub>空<sub>レ</sub>物<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>孔<sub>レ</sub>象<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>り

福井城下祐阿老種のも<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>浮<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>く

野舎<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>金<sub>レ</sub>津<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>山<sub>レ</sub>氏<sub>レ</sub>二<sub>レ</sub>通<sub>レ</sub>り

ふも宿りをさすも贈答の句附合を

細呂木の筭少く月をさす不了なて趣の

や此句を携へて雲々の旅不習ひまじし

身を携へて通ふぬ愛ハゆるさしや

笑む人よりせねるらひく

筭の戸を叩くハ鳴る鶏も我も

荒地山を越る時高祖聖人清詠をいす

ともおのひ出し

涙拭くも清詠乃び或や荒地山

賀州山中温泉ふて蕉翁の言ありや

湯のふゆいふふ高吟おのひ出し

葺流る軒乃あやや温泉の白ひ

松任ふ家千代尼の流を訪ふ白鳥とて

ぬし出逢ふ千代尼在世乃る杯物後

一松をりぬ

花見をねりてけりけりあま

破きし蚊帳も移る月影 白鳥

金澤ふも十日余り浮杖し手鳴粧衲の

寺より宿りぬ

能登の玉津幡といふよき舎のまはら

京に初ると云名寺ありハ

短歌のよきやむきしん京乃いそ

越中相もこれ稽り

長しきわらひといは稽り長し

越後の玉より玉り親志し素子志し

云難し

志海志しぬ人皆云し一説志し

これとて生かす所張りし演あり安を

とて國分寺を境内に鏡池を是に地方

念佛一行と勸免ふ 聖人の清面影を

自木像に刻すを鏡池ありと云傳り

と鏡にぬ影ありし鏡池

高田の母下小越所しこれとて信濃の

小福りぬ

中川名をよき越乃箕山村鳥

善光寺小清松のこ残り此清祿分を思ひ

あせしあせ

松のこゝろ歳世よりかたは雲乃峯

姨捨山より花ふはむ雲の面影を以て

月ふは竹笠乃他姿も亦おろし義史寺

をねぢしとまけ文科の月ふむの身てけ

ゆるも唯ひとまははる月月中此おと

入お穿る時あははるや月を詠えんと

そよく山より仮寐して

姨石をちりりふふ月あはし

山ふゆるまゝ心ねまをまて月をあはし

十分の詠えもまゝぬは俄りるをなめ

しゆく大雨降り神のあはるまゝ

高深陵各此大妻よりまゝの山す

岩をせ出己り余も寸前より失しんとお

程うらむはとあは岩乃とまふ不遠

て身をちり先一心即滅と念しあ

漸くあはぬあはぬあはる傳五郎といふ人

有夫婦のふとくいふやはしを情志るも此

あり前青赤ひより山ふくましを藤葉ふ  
 田業物しおろろんけ是しういふふ  
 ろる魚の風縁や終お烈しき風雨ゆ  
 安ふふふもも藤葉はしとてる  
 事且悦ひういふり連くおのき  
 家よ帰ると命持す此時乃命持  
 一ハ今く彼夫婦の情深きぬるま  
 姨姪、里より風きやあゝと

再い関山越越、おまはるゆま杖の此拍子とく

秋芋山や波り友の藤葉、拍子

新瀉里竹菴より舎より折るふ葉おとれ  
 裾さ〜〜〜やの風俗さういふお〜  
 ろ〜居さハ踊〜入ら踊〜の形

此は所謂七不思議の古路ありそ〜巡り之傳り也  
 其此の名月、關の渡辺氏、傷糸よ舎、雅會らる  
 此のよ敷日杖をと〜ちぬ

ま〜と〜つと乃山と〜入里〜葉ゆ〜夏ふ  
 筆の透〜〜〜〜た力能を生〜とありけり

この教をうけ侍りぬ時は先生より五七折り  
末を還ると聞へる事もひらきハ

深る筆やつくようしくぬ折乃以爲

其後白子小松米澤二位思出荒砥山形を考  
る雅支を訪らひ何れも清興多し

米澤より或雅士の求る應りて物乃  
畫りて賛す

鞍馬乃山の峯小石をとりて時雨木の葉れ共の  
面白く虚実自然のけとハ聞えり歌いん

そふ教つてくち

中お松とるま小出と云ふや馬少く送  
るはくふるやふ花系小出りる子お位  
幹少く此ふお花若義家公の陣志を  
右戰場ありゆへ陣の原と云發白  
りてり得てせよとて姿も窺ひ  
繩の帯を結ひしるを紙一枚に  
鞆乃前輪小挿るを予もか浅る  
人れえりけよとて成りて

稲子くわくやうおせや陣の原

山形侯の家士岡村氏乃おま文紹風尼ハ  
 朝暮園師の弟ありよりそ親しく結ぶ  
 深く教白淨杖捨情を慰むる友おまを  
 風五とく偽謬ふりてあま好者おまを  
 とりてはたふ耽りてしゆくそ家おま四五白  
 淨杖贈答附合白教を

甚くまき石寺とくする山刹を三尊ぬけ  
 寺ら蕉菴のまじりて入蟬のあひのまじり

世不空しく下くお清実寂實の地を山家子  
 ちまき甚ぬるま所謂空翠庭陰お落る情を  
 臨志免くくやうも清しそまのむ

その後二日越りかへるはまてををきひ終  
 秋山をさまといふまきぬ

山中やまきくそまのまきくま  
 漸く鶴の比り人家をえんけを叩く  
 浅眉なるまてん程留いさす次あけ家乃  
 空窓もる雨を撞んて何れかへるを



峯のこりき六内うりしき火をこもやして  
いさうくきぬ

甚くはま仙臺名取郡ふり岡崎氏のあふ  
浄林寺のりあふ

程あく仙臺の城下ふ出菊史知昂のあは  
いし祢もあはれりいふ

子賀の浦とる舟りあはれり

松山や小松おとる孔漕きとる

金華山をいふとる

指あるる日月とるし金華山

塩竈の神へ奉納し次不壺の石ぬ

沖乃石末の松山宮城あふあるとる

名高く空へ伝はるとあふ何れもあふ

ありとる再の仙臺の城下りあふ白石の

うらとる立ある陸るあはれり由川乃あ

あふあふ人りあはれすの山あはれり古あ

あふあふ言しとる達出乃大木戸のあふ松

埋木忍摺葛北松原あふ八百川の算路ふハ

通つぬ人さうし秋風の吹名高しこ津さ  
 け地をぬくこけてまゝ小敷白路しむ  
 おわうこくもせぬいふ雪あめ乃新橋空  
 色ぬ身とふきりあうかく空蟬のまぬけ  
 あゆまうらせうあしりれ

下野奈須野原少て

送つて怪し奈須野の枯尾花

日光山少

雪うし今新やうしる空あし日乃光

白る朝暮園の同志殺軍あうく日  
 久しく枝をとくぬ情不新ぬ

武夜日光山乃鐘をやうく古乃の志

こまうし思ひあしあ

鐘氷るおや父母のおもひを

をゆく陸奥北方とるまぬまうす

墨田川をさうきハ何となく郷不路

土地こそまれ

そふちさうよ何となくひても都る

漸くや江たたり出有え居宗道乃高き  
 尋年暮つきぬけ主人老夫婦初てれお人  
 あうら親子の申ふ相逢こころの意を  
 深りましく懐乃よめくさおこまき  
 ああてあまの道の飛送り一會し道は  
 流りの一筋を渡しも有え居所の誘掖  
 をあてこころ路程さまく杖を留後し  
 周縁よふあまのま

愛より初古の道を出一時朝暮固師ふ  
 添文玉のまゝ一秋峰竹を令ぬりま  
 逢ひいりや

長き懐も愛りてありて力子

け後さてもあまきこら俳癖の名をかくて難  
 會茶席ハいふもさふ諸侯貴權乃淨燕  
 言子ふもはさあけあてさるまゝ多し  
 殊文花実庵風尼君ハ雖也の以志他ふ  
 増りては難ふものあまこふし

又麻布六本亦ふ木工屋作左流つといふ

人有實仁温雅の志源くも心をあきら  
 り親子乃こしく已ら家小別室をふち  
 長と此宿の事をゆるし人を恤る情あは  
 有難くも後の東遊より再此室  
 了りやとましく時七絃琴を自創しく  
 予小正の心を学んまむ今ふ身をそふ  
 こそまう推りへよむ流水琴は是へ  
 予ら麻布子佐右路し一盤三年夏の  
 比翁の言を聞きあはれを懐ひし

影陀の限り重んじむ涼し師にあふ

吹入る風もうほりまをふ時 翁の言を

園師の月並華小露木々十士とりのま  
 職務常府あるりゆへり毎くやとま  
 ししく風雅の園をそまけりぬ  
 江戸ふくえ具り

月をさるふきの山直翁の初出

東武より三と勢の滞秋も風交雅友の園り  
 後のま御徳業起りよのこをりて朝か

夕亦東往西奔子時ありし  
甲辰の年端午前を記し  
古に北才人とおもむきぬ

五十三次見しやふ懺う邪

吉原驛少く

涼し花々各物ふし一筆ありし

大井川ありて

たつたつた浮きもふし大井川

佐理廻りしを又渡路へ出ぬ田村あり

細竹廣うり暮らぬはく色あり年  
西園へ移りし時様乃ゆりしとて書を  
撰ひ侍り集ふ事々餘ふの白くは  
多しりも重けよを乃傳年とてしを  
かへらふは後東西におもむきを  
信路りおもむきしし年月免り又  
多ふるを收ひ相共りし風出の奇  
ありしとてしし浮れ又此色あり  
臨篁亭白千翁とて此色の好者あり

来往度く厚子と新情不取りぬ

ふ水とるまゝ承くおのけし一葉々原をうけ

古戦場をく

安こころのおく程はとしし郭公

長良川乃鶴飼をころす

書を照す知のあつ水や移れかゝる

水無月の比朝暮園師吾妻をまじりま

を待くけ侍りく

は程くは汲み岩手の山清あり

是に結く附合百款け分教養をあり

師の意をいひおもさふ同志の強き水

波くひまいて日取乾無はくは

るをふし

此所の老職一伊藤氏宗長は茶

道く一ひくある好者をして師弟の園を

結ひしをま時くゆきひてあ人をまぬ

立秋

一時秋くあふるふく秋の秋 朝暮園

秋の月何より散る音に雲

菊舎

秋の月何より切る音に露の糸

玉茶坊

或日細竹美人と露の音に苦い音にせいの

涙はに到りて

山つゝも芳打切て流白く

玉茶坊

朝暮師及予白并遺却

中秋不破の月を鏡の舎とて連る

粒多小附合巻を五

○長き前文  
を累す

進つてゆきふの里の月もはるかに

朝暮師

頼有る名録なり乃るを

さねてそ我更科由義理不破の月をそ

師乃録先を筆よそと名不とそそをそ

見巡るましう今日ゆきの時不より平生

ふふの一言も己の行色をのこほり志先

よと老乃か切不論しふふ此心をも休め

そやとは一寸を留傳ふ

ゆき晴も月不ぬの薦一枚

送別

○佐和古道をゆくは四と路の月日恙なく井  
 深し加しこ泊しけは秋ハ美濃路小留わり  
 雲雪の宿いり存の信をゆきとせし長の茶舎  
 元名不お小不破乃月乃を名宿の燈をこく  
 僕い志きのあつちあれ今も乃残情ゆく  
 旧阿の父母のあゆりこもけうと志のこ  
 るはりたすきゆり路の志なるあを考  
 るはるあふ平生の信をこすれこすこ  
 るはるあふ平生の信をこすれこすこ  
 松をこすこす

津のやゆき月よ茶を月もゆて 百茶坊

かよもさうりあきゆ路の志をこすこす  
 三りあふ一さのゆりあきゆ路の志をこすこす

同よさうりあきゆ路の志をこすこす

何れも長き前書もとも略しぬ

目も露おと送るや葉の山路 朝暮道

身り照り解は影もあゆみ 菊舎

出来初穂先や真糸のけさき 百茶坊

嵐も流る花もあてこすけ 其柏

寮とく水の子をゆりしと松さき 杜因

とかくおちもあをれを信を 森雨

蜀山も今ハさき一那ハ錦すれ 鬼從

お用此風の書院吹ぬく 可啓



待遠くありあらく暮子や烟草益 大悟

めさるる節乃又も糸沙汰 得風

一本も根強ふ花の咲ささく 霍之

畠よりおひらりれ種もね 史琉

下祢宜も神乃威を借ら神伝さ 葉汎

三平日くくひの如命も只損 夫石

三条も五条もぬしとく空の橋 相里

引深め呼吸しやつて飲ふら 翰花

清をまぐくゆるい銀子云宿め 葉雨

東より茜ささくあけやん 里橋

満汐の朝月をくく片も水不 有水

腰れ冷さる一貼く産毛 風駕

鼻ナリさふ縁うす駕籠へ糸移り 周路

敷ちくくくの砂り第目 栄史

幾まきもつらぬ花と小舟の花 万裏

あらく来よとて等し蝶く 乙外

右短歌行

同前書略

星我をとらましく馬不見まの月の橋 百茶坊

まきり末あは秋も祝ひ色 菊舎

鶉鳴し路まきも田了廣うそ 朝暮主

志らうく水乃流きり音 里英

余念あきと夢いの窓の細ゆ里 廬橋

いづきと氏を人うらふま 左詠

祝儀物あまのあ水乃と幸此市 采湘

馬の喧嘩うさつと騷い 成辛

高軒ゆまう起せと酒多きく 卓路

退きぬ縁の子まきと春てを 曉雪

いかりく造化のむ乃枝く小 宜哉

神の鎮座此あうと世実さ 逸等

目下も志ばうとまふま太く 柳溪

ちらりくとも使も公あま 里旭

飼鶏のちまきくも印と人柱 文左

あうらま日私乃りあを鶴うら 草深

若危れまきく茶粥よ和くひま 由古

そまきく夏の志ばおうら 以三

月瘦く透るこゝろを影志のり 冬花

けあろ猿乃其花を津草 夕寄

耳馴ぬ祖父の叫の伽ふるま 露月

三と路何そ乃須應れつとく 二了

咲まむを那健了く 白千

亦もやそまを如青柳の系 白素

同短分行

藤下山中柏原醒井樋口高宮等（巻末）

川並村人も杖を寄程あく東海をり草

津驛養尊寺りやとるま和泊里し

とあろく今ゆるされるまうく散々問評

まく附情言多ふりし難く

湖眺望

おろくれを澄とるま比良の高根れ見そし

よるま群居く様不堅田乃鴈もむつりし

雲の時雨り濡やぬ唐崎乃松を盤の

操をちるま三井小郷言帯白鐘のたまた

諸行無常の淋くを志ありま又粟津此

身不志玉嵐くくしふ人の楳嶺を望む  
 とまきくの赤あふれを辨田乃夕月ふ  
 風流を輝をよよ石山の名ふるま月の方  
 をあくら水ほくも一先故久人急まあむ  
 くるきくく帆の幸をゆるく矢楯北岸  
 とらまふり移き八鶴乃浮巢のそゆら  
 あそふ川しう遙れ沖子宮のうらぬ  
 とらくむ人船うくハツの秋意を

美濃宗正の添文を携りて初と洛の書林

橋屋治と唐をヨ守と宿りぬれよる秋  
 冬京楳北岸り風極勢しるる  
 とら初月く素山実不繋さる舟のうら  
 漸く古くく物まし比るそと筆北岸のそ  
 阿そ家ふ七弟り叙りを記す

○たふや明のやしくちらそいありひしとらあむ  
 一字茶井一ま入由宅をしをよらそい毎しと

待たふらまは香習ひむ筆の梅 一陽君 今始

筆祝

筆久しく誌玉(回歴せしうとも)津くあ

今年豊浦の古より仰り父母の傍ふ  
妻をむえ妻をさく

生をきかすくをり明の花の春

人日

春のちり柳と梅やとあそび蕉翁の高吟を

思ひ予をたすち初るつらえむよを

あはちりふあさく給仕や甘柿粥

春

解く初物之れ春しを春の雪

りゆく空の晴ふんそくつら月

雪つら皆甚なりとらしくお梅う那

一昨日をきくゆりこり初きう那

系と空ハまき捨らぬ蛙う那

引糸のりきくそ持あれゆりの春

鳴や雉子ねぬ乃初く離れり

横をり雲をりきくはねら哉

紫雲ふく中より水程はく糸  
山のや漸く海もくもくもくの  
蜂の巣やふぬ人よ海を憎くれ

夏

亦借りて借息もくたやあつち  
郊外や昔を歩くぬく乃高  
初のもく耳くあしりて  
葉様やふぬ山乃名もきく  
濁りては流るる花

月とあやふかりぬ梅涼  
旅人の知りては清く  
古時より雲とくえりて

秋

朝の月や青く蒼く  
ゆひ目解はくは  
とくえぬあふぬ  
鳴くや流るる水  
切き縄をむくは

まのうきさうい 結ひあらはれて暮らふ  
 路より 念のあふく 雲あふみ 暮出く  
 名のるや 月も 見えも かくれても  
 あり 後玉 ぬりたり 月今宵  
 二葉さめく 果も 二葉さめく 秋  
 おもひゆく 座へ もゆく ちの麻  
 見えゆく おもひゆく ちの麻

行秋

今宵 露を惜し けり あり 初時雨

冬

掃出 かくし おもひゆく ちの麻  
 おもひゆく けり のさめ ちの麻  
 おもひゆく けり のさめ ちの麻  
 月の影 果も 海あり 雪は朝  
 つく 来て 下 夜 鳴り けり 物の雪  
 伊は 先乃 星も きゆく ちの麻  
 ちの麻 の雪 津も 氷柱 ちの麻  
 中よ ちの麻 山 川も ちの麻

三 涯を渡りて四時の暮る田の暮り

其かあらうに金銀もあは花乃雪

下学をたのむる哉

砂り遠くても魚は若くぬ

暇白の色暇白を却けし

いふまゝ今も嘆き芽出さるる春様

四時の暮るも佳しちのしむる侍り

さきく新玉室のしやらり乃新



